

KYTのすすめ

釜 田 朗

奥羽大学歯学部附属病院における医療安全の仕事に関わるようになり、10年近くが経過した。その内容は、医療安全推進委員会においてインシデントレポートの分析や改善案の提言、病院研修会での医療安全啓蒙活動などである。今ではこの会議は、昨年4月の病院内組織の改正に伴い医療安全カンファレンスと名称を変更し、毎週月曜日の夕方に開催している。これは、医療安全対策加算を算定するための要件の一つではあるが、組織的な医療安全対策を実施している保険医療機関として、保険点数上で評価されているものである。

そもそも、医療安全が声高に叫ばれるようになったきっかけは、ご存知の方も多いと思うが、1999年のY市立大学医学部附属病院でおこった患者の取り違え、それに続く目的と異なる手術が施行された医療事故であった。その後、都立H病院での血管内に消毒液を誤注入した事例、2000年になりK大学医学部附属病院での人工呼吸器の加湿器にエタノールが誤注入された事例、T大学医学部附属病院での静脈内への内服薬誤注入と立て続けに医療事故が発生し、大きな社会問題となった。これを裏付けるように、主要新聞における医療事故の登場件数は、1999年までの10年間では毎年約200~300件くらいであったものが、2000年が約1300件、その後は毎年約3000件と10倍程度の増加を示している。これは、著名な大病院や評判の良い病院で患者が死亡に至るような単純なミス（患者の取り違え、部位間違え、薬剤や投与量の間違えなど）が発生したことが社会的な関心を呼んだもので、2000年を境に急に医療事故が増加したわけではなく、それ以前にも表面化しない医療事故はかなり存在していたと考えられる。

時を同じくして1999年、偶然にもアメリカで発表された医療事故とその防止策を提言した報告書、「To Err Is Human」が発表された。それには、「人は誰でも間違える」ことを前提に、間違っても（事故を起こしても）障害に至らないようにするにはどうしたら良いかが示されている。1990年代までの医療事故に対する考え方は、医療事故は絶対にあってはならないこと、個人の注意で防止できると信じられていた。しかし2000年以降、医療事故は誰にでも起こりうること、チームや組織全体の在り方を改善しなければ事故は防止できないものと概念が変化した。そこから見えてくる重要なことは、個人を攻撃して起こってしまった誤りをとやかく言うのではなく、安全を確保できる方向にシステムを設計し直し、将来のエラーを減らすように専念することである。

最近、福知山市の花火大会で露店が炎上爆発し、多数の死傷者を出す事故が起きた。発電機にガソリンを入れる際、鉄板の炎が引火し出火、その後近くに置いてあったプロパンガスボンベが爆発したらしい。楽しいはずの花火大会が一瞬にして惨事の現場に

なってしまった。テレビニュースには、焼けこげた屋台とパニックで逃げ惑ったと思われる散乱した多数のサンダルの画像が映し出されていた。

さて、「人は誰でも間違える」のであるが、事故を起こした店主は、KYTを行ったことがあったであろうか。すなわち、危険(Kiken)+予知(Yochi)+トレーニング(Training)のことである。これは、もともとは建設現場で使用されていた言葉で、作業の中に潜む危険を話し合い、予知と対策を行う訓練のことである。KYT（危険予知トレーニング）を行うと、1) 危険への感受性を高める、2) 危険に対する集中力を高める、3) 問題解決力・意欲を高める、4) チームワークを強化する、5) 安全意識の高い職場になる等の効果が期待されている。KYTには、イラストから危険を予測し対策を立てる「イラストKYT」、指でさして声を出しエラーを減少させる「指差呼称」、職員の健康状態を確認し問いかける「健康確認」の3種類がある。イラストKYTは、イラストの中に含まれる危険を予知することで、普段は気が付かなかった危険を認識することができる。たとえば、ベッドで寝ている患者に点滴をするナースのイラストがあったとする。点滴台は固定されておらず、ローラーが動いて台が倒れる可能性がある（現状把握）、点滴台が固定されてなく、ローラーが動いて倒れ、ラインが外れてしまった（原因追求）、点滴台をベッドサイドに固定できるものに変更する（対策立案）、ローラーが付いていない器具に変更して点滴ルートの点検を徹底し、「固定よし!」と指差呼称する（目標設定）の4つの作業をするのである。最後の健康確認は、姿勢、動作、眼、表情、会話などをとおし、職員同士で健康状態を把握することで、ヒューマンエラーや事故を防ぐことができる。

「人は誰でも間違える」からこそ、ぜひ医療現場にKYTを導入されることをおすすめする。

(奥羽大学歯学会 会計担当理事)